

「自主創造」のインカレ

インカレの歴史も 20 年を越えた。マイナースポーツであるオリエンテーリングの学生選手権が、その時代時代の流れの中で、常に学生オリエンティアにとって最高の存在であり、また常に最高レベルの大会を提供し、一度も中止することなく継続してきていることの原動力についてここで簡単に歴史を振り返りながら考えてみたい。

実は最初のインカレの提唱者は、半分はその頃唯一存在していた学生組織である関東学生連盟の幹事であった。もう半分は、そしてこちらの方がより大きな原動力となったのであるが、その当時の日本オリエンテーリング委員会のある役員の方である。その方から当時体力作り運動の一環として傘下の週刊誌まで含めて大々的にオリエンテーリングに力を入れていた読売新聞社に力を貸していただけるよう尽力していただき、上記関東連盟の幹事OBが地図作成や運営をする形で第1回インカレが開かれたのである。第2回もほぼ同じ形で開催されたが、この形式は第3回にして既に踏襲できなくなって大きな壁を迎える。各地区に学生クラブが育ち、組織化が進む中で、議論を尽くして出した結論が、「インカレは学生の全国組織が主催し、皆で作り上げていく」ことであった。以来、この大原則の下に学生も議論に参加し、出来ることは運営面でも参加することによってインカレ創造の歴史は作られていくことになる。学生組織の歴史もインカレの発展を追うように進んで行く。

宿泊込みの日程となり、前日に競技説明や開会式を行うのは第3回より始まった。またモデルイベント地図も第3回から用意された。第5回にして中心勢力の関東以外で初の開催(しかも、日本最高テレビン群の富士山麓)、第6回で関西と全国組織としての実績も踏み、第7回で当初からの念願であった個人戦・リレーによる団体戦の2日間大会形式の開催を見る。また、母体となる組織も「日本学生オリエンテーリング連盟」となり、六地区学連が出揃った年でもある。第8回では各大学の応援にも一段と力が入るようになり、第9回からはアドバイザー制度が採用、第12回大会からは「見せる大会」への取組み、第13回大会からは、しっかりしたマニュアルと報告書の作成、16回の年度(93)からは、秋にショート種目の選手権の開催、第18回からは本格的な舞台や放送設備を用意した演出面での充実、第19回からコントローラと裁定委員制度、第20回で新たなシンボルマークの制定、という足取りで今日に至っている。今、思えば当時のマイナースポーツのいくつかはスポンサーの撤退などにより学生の全国大会も消滅してしまっている中、我々は確固たる歩みをしてこられたのは、自主創造の精神の賜だったと言えるであろう。が、反面今後の更なる発展と永続を望む上では、一つの弱点でもあるとも言えるのである。

マスメディアの後援という点では、第1回、2回を主催した読売新聞社が第4回から第15回まで後援をいただいていたが、社の方針転換により撤退、第16回からは毎日新聞社に後援いただき、新聞報道等でお世話いただいている。

またその間、常に最高水準の競技環境を提供し、円滑に運営して行くため、実働部隊として尽力していただく実行委員をはじめ、幹事会・理事会・技術委員会などでそれぞれが必要な議論を行い、競技規則を改正し、多くの人の血と汗と時間が注ぎ込まれて来た。

今後の課題としては、第15回時をピークに減少しつつける加盟員数とそれに伴う歳入減への対策、報道していただくマスメディアやスポンサーの問題、永続性を確固たるものにするためのテレインコントロールを含めた組織上の整備と人材育成（特にインカレレベルに足る地図調査者の育成）、1991年に社団法人となった日本オリエンテーリング協会との組織上の整合性、などが挙げられる。これらの宿題を背負って今後のインカレと学連の発展を担うのは、今回熱い想いでこのインカレに参加してきている君達である。

選評についてのコメントは省略する。上記の記録がそれを如実に物語っているし、青春時代を仲間としてライバルとして、共に過ごした熱き想いがそれぞれの心の中に確固たるものとして残っていることだろう。今回の舞台を用意した実行委員の面々も「自主創造の精神」の担い手であり確かな継承者なのである。

（山川 克則 / 日本学生オリエンテーリング連盟理事）